氏　　名	江口　真規
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	博　甲　第　7606　号
学位授与年月日	平成　28 年　3 月　25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	日本近現代文学における羊の表象

主　　査	筑波大学	教　授	博士（文学）	浜名　恵美
副　　査	筑波大学	教　授	博士（文学）	青柳　悦子
副　　査	筑波大学	准教授	博士（学術）	加藤　百合
副　　査	筑波大学	准教授	博士（文学）	齋藤　一
副　　査	筑波大学	准教授	博士（文学）	吉原　ゆかり
副　　査	白百合女子大学	教　授	博士（文学）	荒木　正純

論　文　の　要　旨

本論文の目的は、近年台頭したアニマル・スタディーズの動向を踏まえつつ、1900 年代から 1980 年代までの日本近現代文学における羊の表象を文化的・社会的権力の変遷を反映するものとして考察することである。

本論の構成は以下のとおりである。

序章
第１章　夏目漱石『三四郎』――「迷羊（ストレイ シープ）」の英文学的背景とその解釈――
第２章　江馬修『羊の怒る時』――関東大震災における怒れる民衆としての羊――
第３章　らしゃめんの変容――唐人お吉物語と戦後占領期における羊の表象――
第４章　安部公房作品における羊の表象――「満州」の緬羊政策と牧歌的風景の構築――
第５章　村上春樹『羊をめぐる冒険』――「迷羊」の継承と三人の「羊つき」――
結章

序章では、日本で羊はよく知られているが、実は明治期以降、欧化政策とアジアへの植民地政策の一環として西欧から輸入され飼育された動物であることを力説してから、羊を描いた日本文学に関する先行研究では羊の歴史性に注意が払われず現在の羊に関する知識や認識が自明視されていることを批判的に検討し、アニマル・スタディーズを筆頭とする理論的枠組みから、羊の表象の変遷を解明する本論の

課題の意義について論じている。

第１章では、夏目漱石の『三四郎』（1908）に見られる羊の表象について考察している。この作品の「迷羊（ストレイシープ）」という表現について論じた先行研究では、キリスト教の羊の象徴性に基づいた読解が多いが、“stray sheep”という語の初出が、漱石の研究対象であった 18 世紀英文学の小説、ヘンリー・フィールディング（Henry Fielding, 1707-1754）の『トム・ジョウンズ』（*The History of Tom Jones, a Foundling*, 1749）であることに着目し、英文学を通した羊の概念の輸入と、それが明治時代の日本の社会的言説に適用されていく過程を見出している。

第２章では、1923（大正 12）年の関東大震災における被災体験に基づいて執筆された、江馬修の『羊の怒る時』（1924-1925）を分析の対象としている。この作品は、震災時に発生した朝鮮人虐殺事件の様子を克明に描いたルポルタージュ作品として読まれてきたが、本論文では、江馬のプロレタリア作家としての経緯や、『台湾日日新報』(1898-1944)に掲載されたという作品発表の背景を分析することにより、羊は哀れな犠牲者を示しているのではなく、朝鮮半島出身者や社会主義者に暴力を行使する日本人民衆の「群れ」を擬らえたものであることを解明している。

第３章では、日本近現代文学において羊が女性というジェンダーを付与され表象されてきたことについて考察している。日本語の「らしゃめん」という言葉は、羊を表すものであったが、開国以降、西洋人男性に性的サーヴィスを行った日本人女性を意味するようになった。このようならしゃめんの物語として人口に膾炙している「唐人お吉」の物語を扱った 1920～30 年代の文学作品を中心に、羊の比喩が異文化・異人種間の性交渉を連想させるものへと変容した社会的経緯を解明している。また、女性化された羊の表象が、戦後アメリカ兵を相手とした日本人娼婦の「パンパン」に重ね合わされると同時に、高見順の『敗戦日記』（1959）や大江健三郎の「人間の羊」（1958）のように、敗戦国民の象徴として「去勢」され女性化して描かれた日本人男性像にも適用されており、女性を示すものであった羊が、占領期には被支配者の男性の表象として用いられた意義について解明している。

第４章では、緬羊飼育が大々的に行われた「満州」で幼少期を過ごした作家、安部公房の作品を取り上げている。「詩人の生涯」（1951）等に見られる羊や羊毛製のジャケツの描写には、「満州」の羊を囲む生活風景が牧歌的で郷愁を誘うものとされた当時の社会的背景が反映されている。また安部は、「盲腸」（1955）や「羊腸人類」（1962）など、食糧問題解決のために羊の腸を移植される人間の物語を繰り返し描いているが、羊は身体改造技術の実験材料として、科学技術の恐怖を示す「化物」のような動物でもあったことを明らかにしている。

第５章は、1970 年代後半を生きる若者がある一匹の羊を探す冒険譚を、明治時代以降の羊の歴史とともに記した、村上春樹の『羊をめぐる冒険』（1982）について考察している。前半では、村上が漱石の『三四郎』における羊の表象や、日本の近代化と軍国主義を象徴するものとして羊のイメージ、また安部公房が提示した科学技術と羊というテーマと想像力を継承していることを明らかにしている。後半では、羊博士、先生、「鼠」の三人の登場人物を襲った、羊が人間の体内に取り憑きその肉体や精神を支配するという「羊つき」の現象に注目し、羊の表象の変容について解明している。

結章は、日本近現代文学において、実在しない空想としての動物から、近代化政策と植民地政策を担う動物となり、戦後には再びイメージとして消費される動物へと変化した過程を追究した、第１章から第５章までの成果をまとめ、さらに今後の課題について述べている。

審　査　の　要　旨

1　批評

本論文は、1900 年代から 1980 年代までの近現代日本文学における羊の表象をアニマル・スタディーズの視点から解明することに取り組んだ意欲的な論文である。本論文の著者は、日本文学における羊の論考では、羊の表象の歴史性に注意が払われることがなく、現在の羊に関する知識や認識が自明のものとされた上で論が展開されていることを批判し、日本文学における羊の表象の変遷を歴史的枠組みから解明しなければならないという立場にある。論文の各章の考察は一貫してこの視点からなされ、また分析も著者の立場を支持するものであり、全体としてまとまりのある論考となっている。

本論文は、一方ではアニマル・スタディーズの西洋中心主義を批判的に検討し、ポストコロニアル・アニマル・スタディーズや環境批評、比較文学等の最新の理論的枠組みをとりいれ、他方では国内外の資料の丹念な実証的調査を行い、1900 年代から 1980 年代までの近現代日本文学における羊の表象の歴史的変遷を体系的かつ学際的に解明している。夏目漱石から村上春樹までの作品のテクストとコンテクストの分析を通して、羊の表象の多様性と特異性が明らかにされている。羊の飼育が長く定着している文化圏とは異なり、日本では、唐人お吉や『三四郎』の美禰子、戦後占領期のパンパンのように、新しい海外文化と接触した女性が羊として表象されている事実を見出している。また、日本の羊の歴史を「満州」を射程に入れて捉え直すことにより、ポストコロニアルの視点からの羊のイメージの構築過程を辿り、日本における羊の表象が、西欧文化の受容から形成されただけでなく、緬羊飼育の軍事目的とは乖離して構築された「満州」の牧歌的風景への憧憬や郷愁を包含していること、さらに羊を囲む心象風景が 1960 年代以降の観光牧場の展開にも継承されていることを解明するという成果をあげている。とりわけ、第２章の江馬修『羊の怒る時』と第４章の安部公房作品における羊の表象を中心に新知見が見られる。

以上のように、本論文は力作ではあるが、問題がないわけではない。英文学作品における羊の表象と農業政策、日本における牧歌の翻訳と受容など、本論文が十分に論じることができなかった課題が残っている。

とはいえ、このような課題への取り組みは著者の今後の研鑽に託するところのものであり、近現代日本文学における羊の表象をアニマル・スタディーズの視点から新たに解明した本論文が達成した成果は極めて優れたものであると判断される。

2　最終試験

平成２８年１月２３日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3　結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。